

2002年

完全週5日制に 臨む

’02年の学校完全週5日制実施まであと2年を切った。ベネッセ文教総研が1～2月に行ったアンケートでは、’02年度のカリキュラム案を作成済みの高校は30・9%、’00年度内には80%以上の高校で作成を完了するという結果が出た。だが、現行の教育課程のままでは完全週5日制となる。’02年度カリキュラム作成には各校とも苦慮しているようだ。そこで今回は、完全週5日制の課題を再検討していく。

完全週5日制の問題点と課題

土曜日が休みということは、授業時間数削減への対応だけでなく生徒にどう土曜日を活用させていくかが大きな課題となる。大学入試の変化も含め、スクール・アイデンティティに基づいたカリキュラムの検討が必要だ。また、学力向上に主眼を置くと思われる私立校でも最近では土曜日休日の動きが出ている。

山口県立山口高校の新たな選択

’02年度のカリキュラム作成を視野に入れ、’00年度から65分授業、2学期制をスタートさせた山口高校。週30単位で実績を持つ同校は、先行して65分授業を行い、授業内容の精選を再度試みる。また、B週金曜日の4、5時限には授業でなく、学校行事を組み、完全週5日制に向けて、新たな模索を始めている。

問題点

1 授業時間の減少

土曜日がすべて休みになることにより、毎週100分(単位時間50分×2時間)が削られる。現状でも教科書を進めるのに精一杯という状況だが、さらに授業時間が少なくなる。

'92年度2学期から月1回の学校週5日制が公立校で実施され、'95年度4月から月2回が週5日制となった。その間、'94年には高校教育課程の改訂が行われた。

これらの改訂によるカリキュラムの変更の際に、これまでは週6日制の従来のカリキュラムをベースとして、減った時間数分をどこで確保するか、という所に焦点を絞って、変更内容が考えられてきた。つまり、行事の精選や7時限目の実施などで、従来の時間数を確保するという方向が主流だったと

言えるだろう。

しかし、'92年度から実施される学校完全週5日制については、「授業時間数の確保」という思考を捨てずにカリキュラムを作成するのは難しい状況となっている。大学入試の変化等も踏まえて考えると、量的改善ではなく、授業の効率化・内容の精選という観点からも検討を進めていくべきだろう。

単なる時間数減でなく学校の教育方針に根ざした検討を

はじめに、学校完全週5日制実施による課題を整理してみる。

一つ目の課題は、問題点1、2で挙げた授業時間数の減少への対応だ。1週間に2コマ、約100分が減ることにより、どの科目を減らすのか、減らす分をどこで補うのが課題となる。

現状と同じ時間数の中で、いかに授業の比率を高めていくか。各高校は様々な対応策を立てているようだ。1コマ当たりの授業時間数の変更(45分、65分授業など)、2学期制の採用、行事の

問題点

2 1週間当たりのコマ数の減少

土曜日の2コマ分が減るため、1週間当たりのコマ数が30コマとなる。現状の体制のままでは、何かの科目のコマ数を減らさなければならぬ。

完全週5日制の問題点と課題

自学自習の意識付け 授業内容の精選がカギ

完全週5日制の導入に際して、問題となるのは授業時間数の減少だけではない。平日に身に付けた学習習慣の崩れをどう防ぐかも重要な視点となる。大学入試の動きを踏まえながら、カリキュラムの作成に当たって土曜日の有効な活用のための施策を考える。

精選など、いろいろな方法が議論されている。

ここで忘れてはならないのは、「スクール・アイデンティティに根ざした検討」を行うことである。授業時間数の減少、コマ数の減少分を補う対策法としてまず考えられる方法は、何らかの教科が犠牲となり授業時間数を減らすことである。

ただ、どの教科も現状の授業時間数で規定内容を教えることに手一杯になると、授業時間が減るのは厳しい。となると、結局は「痛み分け」の方向に走り始める。各教科をできるだけ均等に減らし、どの教師もできるだけ納得できる授業時間数にするということになるだろう。

だが、教科ごとの陣取りゲーム的な色合いが濃くなってしまつと、どうしても「生徒不在」の議論となつてしまいがちだ。そうではなく、まず「どんな生徒を育てるために、どんな教育をどんな方法で行い、どんな成果をめざすのか」というスクール・アイデンティティをしっかりと確立させる。そして、達成目標を教師間で共有することによって、本来の主旨から外れることなく検討していきたい。

問題点

3 生徒の学習習慣の維持

学校で学習する日数が減り、土曜日・日曜日と2日連続で登校日が空くことで、授業の空白が倍に増える。そのため、生徒が平日に身に付けた学習習慣を維持することが難しくなる。

問題点

4 休日となる土曜日の活用

休日となる土曜日は、生徒に時間を返すという位置付けのため、「学校体制の中での取り組み」を行うのは難しい。生徒の自主的な活動として、何に取り組ませるのか。

自学自習の意識をいかに生徒に持たせるか

二つ目の課題は、問題点3、4への対応となる土曜日の位置付けだ。この問題は、ある意味、授業時間数の減少よりも重要なのではないだろうか。

従来、学習日であった土曜日が休みになることで、学習日が減るだけでなく、授業の空白が倍になる。つまり、平日に身に付けた生徒の学習習慣が休みとなる土日で崩れてしまつ危険性が高くなる。さらに、「休み」遊び気分が引き金となり、月曜日午前中や金曜日午後の、生徒の学習意欲が低下する恐れもあるだろう。

一方で、土曜日に学校活動を行うことは、現状の見解では難しいようだ。ある県の教育委員会は、「学校体制の中での取り組み」という位置付けであれば、『土曜日は学校が休み』なので認めることはできない。生徒の自主的な行動ならば、学校長の判断と対応に任せられる。現在の部活動の考え方と同じである」とコメントしている。

用させていくか、その仕掛け作りがカギとなると言えるだろう。

ある高校では次のような見解の下に土曜日の活用が検討されている。

「自由な時間が増えたときに、何をしたいかわからない者や生活のリズムを崩したりする者が生じる危険性があるのは事実。しかし、土日を行事などで拘束してしまつのも問題がある。したがって、本校では週5日制となつても学習日は6日であると捉え、5日の学校生活に加え自主学習日1日があるものと考えている。具体的な方策はまだまだこれからの検討課題だが、自学の習慣付けや授業での興味付けを学校全体で考えていくことだと思っている」

自学自習を進めていく上でカギとなるのは、生徒が自分で学習できるという前提でのプログラム作りが挙げられる。宿題を課す、土曜日は自習室として学校を開放する、講座を設けるなど、様々な仕掛けが考えられる。実際にそれらを試行している高校、後述する山口高校のような例もある。

生徒に「自学自習の成果が上がりそうだ」と思わせる仕掛けができれば、後はうまく機能していくのではないだろうか。

02年入学生が挑む 入試の変化も視野に入れ カリキュラム作りを

02年度入学生用のカリキュラム作成の中で、もう一つ留意しなければならぬ点は、大学入試制度の変化である。特に06年度の新課程入試では、センター試験などを中心に様々な変化が予想されるが、それを待たずして大学入試は変化していくと思われる。

00年4月に出された大学審議会による中間まとめ「大学入試の改善について」では、基本的な視点として、学力検査による1点刻みの入試から脱却し、受験生の能力・適性などを多面的に判断することなどが述べられており、その後、大学入試センター試験の改善や各大学における入学者選抜の改善について提言がなされている。

このうち、05年度入試までに進展があり、かつカリキュラム作成に影響を与えるのは、各大学における入学者選抜の改善に関する項目である。

受験教科・科目の増加

既に京都大は医学部後期日程を生物必修と発表した。また、東京大では昨年、理科・地歴公民の科目増を示唆する発言があった。これらの動きは医学

部での生物必修の傾向や受験生の学力低下を背景としており、今後さらに多くの国立大に広がる事が予想される。03年度入試以降、順次具現化される。05年時点ではかなり進んでいる可能性がある。

思考力・総合力・課題解決力を求める入試問題の増加

大学審議会では、各大学における入試の改善の中で、入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）に即した高度な問題、かつ「生きる力」を求めた今回の新課程の主旨を踏まえた問題の出題を容認することとした。この場合、総合的な学習の時間や課題研究などで総合力・思考力を養っていくことが重要となるであろうし、目標とする大学によってはかなり高度な思考力をつける仕組みが必要となる。

選抜方法の多様化

00年度入試では国立大3校でAO入試が実施された。AO入試は急速に増え続けており、05年度にはかなりの学校数にのぼるだろう。さらに分離分割方式の募集人員の配分比率が是正された場合、後期入試で求められる学力（小論文における表現力・口頭試問に対する発想力）育成を想定したカリキュラム作成が必要となる。

私立校の対応は 学校方針に沿って 方向性は様々

一方、私立校は週5日制にどう対応するのだろうか。4月号で掲載した新課程に関するアンケートでは、公立校と私立校で、土曜日の扱いに関して差が現れた。公立校では月2日の休日が前提となるのに対して、私立校は「休日なし」が47%、1月1日のみ休日などの回答が16%を占める。63%の私立校が公立校より授業時間を多く確保している。さらに完全週5日制になると、私立校では「通常授業もしくは自由選択などの講座を設ける」と回答した高校が4分の1に上る。公立校では、自由選択を前提とした講座の開講も2.6%と、私立校に比べて非常に少ない。

02年の実施までに、私立校は週5日制に移行するのか、東京私学教育研究所の堀一郎所長はこう話す。

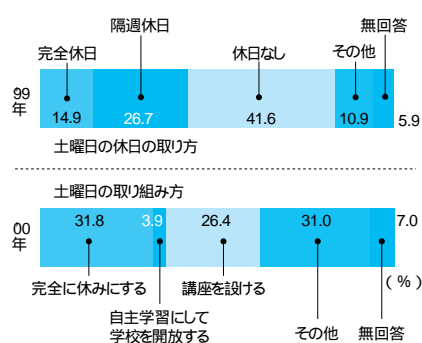
「週5日制に関して、私立校ではそれぞれの学校が学則で決めるべきことであると捉えています。ですから、週5日制を導入するか否か、いつ導入するかなどという具体策は各校に任されています。その中で最近では、学校の特長として積極的に完全週5日制を導

入する学校も出ています」

平日は70分×5コマにして現行より多く授業時間を確保する、土曜日を休みにし選択講座を開講、地域に学校を開放し親子で参加できる講座を開くなど、様々な試みがなされているという。

「学校の方針として週5日制にしないという学校もあります。保護者の要望であったり、学力を確保する体制を整えてから週5日制を実施するという信念からだったりします。しかし、小学校や中学校で完全週5日制を体験してきた生徒が、高校の週6日制についていけないことも予想されます。02年に完全実施とはいかないでしょうが、私立校でも週5日制を真剣に検討し始めているという流れではあります」

私立校の土曜日の位置づけ



ベネッセ文教総研による'99年、'00年「新教育課程アンケート」結果より

山口県立山口高校の 新たな選択

65分授業の導入で時間確保と 授業内容の精選を図る

90年度から月2回の週5日制を導入してきた山口高校は、02年度のカリキュラムを睨み、今年度4月より65分授業・2学期制を導入した。週30コマの授業内容に実績のある同校が、完全週5日制後も授業時間数を確保するために選択した方法を紹介する。

山口高校は文部省の調査研究協力校の指定を受け、90年度から月2回の週5日制を導入した。週5日制に関して先駆的な取り組みを行ってきた高校だ。導入時より4週6休を基本とし、月2回の土曜日を休み、出校する土曜日

も授業を行っていない。学校週5日制は社会の動向から考えて、避けて通れない問題であることを明確に認識した上で、当時としては大胆な選択だった。

これにより、過当たりの授業時間数

は29コマとなり、英語、数学、国語、社会を各1コマ、計4コマ減らして、出校土曜日に学校行事を組み込んでいった(ただし、現行教育課程に移行したとき地歴公民が1コマ増え、計30コマとした)。

02年度までに 授業内容を 確立させたい

週5日制のカリキュラムに実績を持

つ同校が、00年度4月から65分授業・2学期制を導入した。週5日制導入2年目から同校に赴任した齋藤嗣夫先生はその背景をこう語る。

「完全週5日制が始まったら、土曜日に行ってきた学校行事を平日に組み込まなければなりません。02年度以降も50分授業の体制を続けるならば、授業時間の減少は避けられない。ならば、完全週5日制になっても授業時間を確保できるような枠組みに変え、時間に余裕がある今のうちに、02年度以降に

山口県立 山口高校

1870年(明治3年)創立。普通科と理数科を持つ共学校。生徒数は約1200名。ほぼ全員が進学希望。文部省から調査研究協力校の指定を受け、90年度より月2回の週5日制を実施。99年度の合格実績(延べ人数)は、山口大89名、岡山大35名など、国立大に約3000名、立命館大34名、関西大22名など、私立大に約460名。99年度にはバドミントン部、スキー部、美術部、文芸部が全国大会に出場した。



山口県立山口高校教諭
渡壁龍造
Watababe Ryuzo
教職歴24年目
94年度より同校に赴任
英語担当。00年度は
教務部部長を務める。



山口県立山口高校教諭
齋藤嗣夫
Saito Tsuguo
教職歴21年目
91年度より同校に赴任
数学担当。00年度は理数
学科の第2学年の担任

対応できる教材をしっかりと作り出すと考えたのです」

進学校であるため、これ以上授業時間を減らしたくない。しかし、学業以外の生徒の活動、例えば部活動への影響を少なくするために終業時刻を遅くしたくない。さらに、今まで出校土曜日に行ってきた学校行事も、生徒に有益なものは残していきたい。そのためには平日に受け皿を作らなければならぬ。単に授業時間を増やすのではなく、全人教育活動の時間も増やすという観点から完全週5日制への対応を検討していった。

98年度は教務部を中心に他校の事例などを検討、99年度に職員会議で「65分授業・2学期制」を提案し、教師の間で議論を重ねていった。もちろん最初から教師全員の賛同を得られたわけではない。教務部部長の渡壁龍造先生はこう振り返る。

「65分授業を導入したけれど、とりやめた高校もあります。反対する先生も自分なりに研究して、根拠があつて反対しているのです。十分な情報収集と分析を行い、他の教師にフィードバックして、議論を重ねることで理解を得ていきました」

山口高校の1週間当たりの授業時間数

99年度まで 50分×週30コマ = 1500分
00年度より 65分×週23.5コマ = 1527.5分

教科授業の時間数の比較。学校行事・LHRの時間は含まない。
00年度からは2週間で1クールとなっているが、ここでは比較しやすいよう1週単位で算出した。

00年度のB週金曜日4、5時限と出校土曜日の学校行事予定

月	日	曜日	学年	実施内容(担当)	
前	4	15	土	1-3	離任式、地区集会
		21	土	1-3	特編授業
	5	6	土	1-3	特編授業
		19	土	1-3	第1回考査
	6	2	土	1-3	特編授業、壮行式
		3	土	1-3	ボランティア活動
		16	土	1-3	特編授業
		17	土	1-3	小論文指導、避難訓練、賞状披露
		30	土	1-3	家庭学習日
		1	土	1-3	第2回考査
	7	14	土	1-3	校内実力模試
		15	土	1-3	校内実力模試
2		土	1-2	課題考査	
9	8	土	1-3	特編授業	
	16	土	1-3	銀鐘祭準備	
	22	土	1-3	交通安全教室、壮行会	
	30	土	1-3	9/9(土)代休	
	7	土	1-3	特編授業	
10	13	土	1-3	第3回考査	
	21	土	1-3	校内実力模試	
	27	土	1-3	生徒会役員認証式、生徒総会	
	4	土	1-3	小論文指導	
	18	土	1-3	校内マラソン	
	24	土	1-3	特編授業	
11	2	土	3	1-2年第4回考査、3年学年末考査	
	8	土	1-3	特編授業	
	16	土	1-2	模試の見直し	
	22	土	1-2	特編授業、クリスマスツリー、全体集会	
12	19	土	1-2	特編授業、全体集会	
	3	土	1-2	校内模試	
	10	土	1-2	家庭学習日	
1	20	土	1-2	校内模試	
	2	土	3	大学入試センター試験	
2	2	土	1-2	特編授業	
	3	土	1-2	特編授業	
	16	土	1-2	数理解題研究発表会	
3	16	土	1-2	特編授業	
	17	土	1-2	生徒総会	
	2	土	1-2	学年末考査	
	16	土	1-2	家庭学習	

*特編授業...特別編成授業

65分を使って行う授業内容を再検討する

次に課題となったのは授業内容だ。1日を65分×5コマとし、A週、B週と2週間で1クールになるように時間割を作成。これを受け、学年の教科担当者が年度初めまでに授業計画を立てた。だが、65分授業・2学期制を導入することで、総授業時間数が減るわけではない(表1)。同校では既に週30コマでの授業内容を精選している。これ以上吟味する必要があるのかという

声も教師から上がったという。

「同じ教材を1年かけて教えるといっても、50分単位で行うのと65分単位で行うのでは、やり方が異なるはず。65分で行う授業を新たに作っていかねばならないのです。作成した授業計画は実際にうまくいくのか、今は授業をしながら内容を詰めている段階です」(斎藤先生)

年間のコマ数は減っているのだから、1回の授業で教える内容は増える。65分という時間を使って何ができるのか。内容、進度、教材……。何を加えて、何を切っていくのか。65分授業のために教材を練り直すことは、それだけでも

授業内容の再精選につながる。

だが、65分授業は教師にとっても初めての体験となる。授業計画を消化しきれず、クラスによって進度の差が出てくるのが予想された。そこで、02年度までの試行期間の措置として、これまで教科授業を行っていなかった出校土曜日に、特別編成授業の時間を組み込んだ。教師が希望するクラスで教科授業を行えるようにし、進度の調整ができる時間をあらかじめ設けたのだ。また、渡壁先生はこう語る。

「増えた15分は教師にとって魅力的な時間です。生徒の集中力を考えると65分間全力で授業をするわけにはいき

っていきます」(斎藤先生)

授業への意識付けが土日の学習意欲につながる

月2回の土曜日だけでなく、B週金曜日の午後も授業がなくなり、学習日の間隔が広がったことで、土日を生徒にとり過ぎさせざるが、益々重要になったと言える。しかし、休業土曜日に対して、山口高校では特に生徒に課題を出していない。

「部活動やボランティア、文化祭の準備、生徒は自由に行動しています。何もせず休むのも、休業土曜日の一つの使い方と捉えています。数年前まで実施していた休業土曜日の過ごし方に

関するアンケートも現在は行っていない」(渡壁先生)

とは言っても、小学校・中学校と週5日制を経験した生徒にとって、土曜日が休みというのはもはや当たり前。そこで、休業土曜日の位置付けについて、教師は生徒に授業中やSHR、LHRで積極的に伝えるようにしている。

「予習・復習は必ずやるように」と、あることに生徒に伝えていきます。部活動は言い訳にはならないし、平日で消化しきれないなら、そのために土曜日が休みになっているんだと言っています。また、65分授業を実際に体験してみ、予習・復習をしなければ授業についていけないことを、生徒も実感しているでしょう」(渡壁先生)

山口高校では、90年度の週5日制導入

入時から生徒の自主性・自己教育力の育成に重点を置いている。現在も、学習への動機付けは通常の授業への取り組みだけで十分であり、あとは生徒の自主性に任せるという姿勢を貫いている。

「毎年、生徒の自宅学習時間の調査を行っています。土日の勉強時間がゼロという生徒はほとんどいません。生徒は計画的に週末を過ごしているようです。土曜日は遊びに行くから、日曜日に予習をしよう」という具合です。今年度ももちろん、調査を実施しますが、1回の授業の負担が増えたことで、むしろ土日の学習量は増えていると予想しています」(斎藤先生)

試行錯誤の段階ではあるが、新体制に大きなメリットを伴って移行できたのは、週30コマでの授業内容に10年もの経験と実績があったからと言える。

「質の高い授業ができてはじめて、時間を確保したことが生きてくるのです。65分授業・2学期制の導入に際しては、もつ一度スタートするという気持ちで授業内容を見直ししてきました。教師同士で話し合い、刺激し合い、良い点は盗み、また教えながら、お互いの力を高め合うことができたと思います」渡壁先生は、改めて「授業の質」の重要性を強調した。

学校行事の時間を平日に確保し、授業を潰さない

完全週5日制を睨んだもう一つの新しい試みは、B週金曜日の午後後に教科授業を入れず、学校行事を組み込んだことだ(表2)。定期テストや模試だけでなく、生徒会活動や講演会も組み込まれている。

「あらかじめ行事の時間を時間割の中に固定して組み込んでおけば、行事によって授業が潰れてしまつという事態が避けられます。これまで出校土曜日にしていた学校行事をすべてB週金曜日に移行することはできませんが、今年、来年で学校行事の精選を行



市内の清掃奉仕活動(写真上)や理科の研究発表(写真下)など、出校土曜日に取り組んできた学校行事はB週金曜日に移行。総合的な学習の時間を視野に入れて、行事内容を構築する。